



を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

著 者はいわずと知れた臨床心理学の大家にして、自身心理療法の実践家である。その彼がアメリカの先住民ナバホに同業者がいると知り見聞に出かける。

ナ バホの心理療法士はメディスンマンと呼ばれる。しかしその療法は科学先進国のそれとは違う。

治 療を行っている家のまわりを2,000人のナバホの人々が取り囲む。治療者は治療の際患者と同じ変性意識状態に入る。「変性意識とは、通常の意識とは異なる意識状態のことで、精神病者もなるが、そのときは、日常の世界と非日常の世界が混交してしまっ、現実認識が混乱してしまう。が、メディスンマンのように訓練によってなる場合は、必要な現実認識は保たれていて、明晰性を失わないところに特徴がある。禅僧が座禅をするときなどにも、同様のことが生じる」

メ ディスンマンに変性意識に入っで疲れなかと聞くと、自分が癒しているのではなく、自分は「聖なる人」を呼び出しているだけであり、

「聖なる人」が癒すのだから自分はそんなに疲れない、という。

近 代科学の技法は「モノ」は対象になるが、「コト」は対象になりにくい。モノという形をもった現象は普遍性をもった論理で、その本質を帰納法的に捉え、現実演繹して利用することができるが、コトの世界にはその手法は通じない。医学の場合身体というモノには近代科学の手法は通用するが、心というコトの世界には通じない。

メ ディスンマンのいう「聖なる人」とはたぶん「自然」のことであろう。そしてナバホという共同体それ自体が、自然の一部であることを日常的に当たり前の意識となっているのだろう。

ナ バホたちの、できる限り伝統を守ろうとしている人たちの生き方は、文字通り大地に根ざして生きて

いる感じがする。自然との緊密な一体感がある。毎日の生活全体が宗教的なので『宗教』という言葉はナバホ語にはないとのことだったが、『自然』という言葉もおそらくないだろう」

治 療の際2,000人ももの共同体の人々が集まるというのは、心理療法が共同体によって担われ、その儀式を支える共同幻想が、そのシャーマニズムの世界観を共有していることが、実に大切なのだ、と説く。

こ れに対し共同幻想など誰も分け持っていない現代の心理療法家としては「あくまで個人を中心とし、個人の主体性を尊重することから話をはじめなければならない。ここで、現代の心理療法の大きい特徴として、患者の自由意志と個性の尊重ということをあけておきたい。ここが科学的治療とも原始的治療とも異なるところである」

学 校という意思をもった集団と、そのなかにいる先生と生徒という個人について示唆に富んだ作品である。



◀『ナバホへの旅 たましいの風景』
河合隼雄 著
朝日文庫
定価 本体500円＋税